

ケルティース・イムレの世界

- 不条理の中の条理：『運命の不在』

盛田 常夫

2002年ノーベル文学賞受賞のケルティース・イムレの処女作『運命の不在』(Sorstalanság, Magevető, 1975, Budapest)は自伝小説である。sorsは「運命」、talanは日本語と同じように「足らん」、ságは名詞を造成する接尾語である。語義をもっとも良く伝える訳としては、「運命がないこと」ということになる。小説の題名らしく、ここでは「運命の不在」としておこう。

B5版で300頁ほどの短い小説は、ケルティースが15歳の夏(1944年)から翌年の夏にかけて体験した事件を描写する。チェペルの軍事工場からアウシュヴィッツへ連れられ、そこからさらにブッヘンヴァルトの収容所に送られた実体験である。

今更どうして「アウシュヴィッツ文学」がノーベル賞か、という疑問が湧くだろう。戦後、無数の報告や告発書、文学書が出ている。映画もある。屋上屋を重ねる必要があるのだろうか。以下に見るように、ケルティースの小説はアウシュヴィッツを告発するものでも、ユダヤ人迫害を告発するものでもない。「アウシュヴィッツ」告発という視点から見れば、ケルティースの小説よりはるかに恐怖と感動を与えるものが多いだろう。それならなお更、どうしてケルティースが、今、ノーベル賞かという疑問が生まれよう。

ケルティースの哲学

読んで見て分かるが、「運命の不在」は強制収容所の「地獄」を告発するものでも、ナチズムを批判するものでも、ユダヤ人の悲運を訴えるものでもない。そこが、これまでの「アウシュヴィッツ文学」と異なるところだ。

ノーベル賞受賞講演で語っているように、ケルティースの哲学は主体(主観)と独立した客体(客観)の存在を認めない。「客体」が「現実」であるのは、「自分」という「主観」を通してだ。その主観を経由しない客体は、彼にとって疎外されたものだ。この哲学的視点は、サルトルやカミュなどの実存主義的な現象主義に近い。この視点から、強制収容所を経験する少年が、その主観を通して観察した事象を、たんとんと叙述する。そこに、ケルティースの小説の特徴がある。だから、イデオロギーも、予見もない。そうだからこそ、逆に、人々はケルティースの世界に、自己を同化することが容易になる。

彼にとって、ユダヤもナチも強制収容所も皆、与件であり客体である。それが「現実化」するのは、「自分」を経由する、つまり体験することを通してである。とすれば、人が生きていくことは、生きていく限り回転していく世界を受容して

いくことであり、その与えられた条件や環境の中でしか、人は自由でありえない。だから、そのような「現実」から独立した「運命」など存在しない。したがって、「運命」で過去や未来を断定することに意味はないし、「運命からの自由」という考え方も人の生き様を説明しない。「運命」と「自由」という二分法は「生きること」を表現するのにふさわしくない。これが『運命の不在』で読者に伝えたいメッセージである。

「アウシュヴィッツ文学」か？

ケルティースの小説はいわゆる「アウシュヴィッツ文学」あるいは「ホロコースト文学」だろうか。既述したように、もし「アイシュヴィッツ」を告発するのが「アウシュヴィッツ文学」とすれば、ケルティースはこの範疇に入らない。ケルティースの『運命の不在』は二つの点で、いわゆる「アウシュヴィッツ文学」と区別される。

一つは、主人公がアウシュヴィッツに滞在した時間はわずかに3日に過ぎず、アウシュヴィッツの生活が対象になっているわけではない。もちろん、アウシュヴィッツを強制収容所の代名詞と考えても良いが、しかしケルティースにとって、自らがその大半の時間を過ごしたブッヘンヴァルトは、アウシュヴィッツとは異なる世界だったことが意味をもっている。アウシュヴィッツと異なる世界に生きたことが、彼を延命させ、かつ豊かな体験を獲得することになった。小説では主人公が体験した強制収容所の性格の違いが、一つのポイントになっている。

いま一つは、ケルティースが自らの五感で体験した事象をたんと描いており、強制収容所の日常生活を克明に描写する。そこには大上段に振りかぶった正義感も、イデオロギーも、告発もない。ブダペストの生活も強制収容所の生活も、彼にとっては継続する生活の延長でしかない。彼にとって、強制収容所は否定されるべきものでも肯定されるべきものではなく、彼の「現実」なのである。だから、強制収容所も自らの生活、人生の一部である。

もちろん、小説からは明瞭でないが、ケルティースはアウシュヴィッツがもつ意味を普遍的に捉えることで、従来の「アウシュヴィッツ文学」との違いを際立たせている。そのことは以下で触れよう。

不条理の中の条理

強制収容所が不条理な存在であれ、そこにはいわば「囚人社会」の生活がある。「囚人」の自治的社会とも言える。外から見れば、強制収容所は「ゼロの存在」であり、地球上から消滅すべき存在と考えるかもしれない。しかし、強制収容所にも、時間が流れる限り、時間を刻む人々の生活がある。朝起きて朝食をとる。コーヒーを飲んで、点呼が始まる。労働キャンプの仕事はきついかもしれないが、それよりきつい仕事が「普通の生活」にだってあるだろう。仕事が終わってから夕食までの時間には、「囚人たち」の交換市が開かれる。人が生きていく限り、生活の知恵が働く。タバコ1本と明朝のスープが交換される。昼飯のパンと明朝

のスープが交換される。いわば素朴な先物市場が展開する。病院には「囚人」の医者がいる。看護師がいる。主任医師の回診もある。性根の良い奴も悪い奴もいる。それは「普通」の世の中と同じだ。だから、「普通」の世の中に意味はあるが、収容所の生活に意味がないとは言えない。ケルティースにとって、強制収容所の1年は、10年分にも匹敵する経験だったはずだ。けっして、無意味で「ゼロ」の生活ではなかった。

不条理な存在の中に、条理のある人間生活が営まれている。この生活を望んだわけではないが、人生はこのように展開した。それを受け入れる以外にないだろう。だから、人は皆、それぞれの立場で、それぞれの役割を果たしている。

アウシュヴィッツであれブッヘンヴァルトであれ、それが「自分」の体験した「客観」である。不条理か条理か。それは「主観」から離れた価値判断にすぎない。

運命と自由

何が運命で、何が自由かを簡単に決めることはできない。第二次大戦を契機に命を失ったのは「ユダヤ人」だけではない。戦時には命や生活が保証されている人はいなかった。戦いの前線に駆り出された兵士の生活や体験は、強制収容所に比べて良かったと言えるだろうか。強制収容所に入れられるのが運命なら、前線に駆り出されるのも運命だ。ふつうの軍事捕虜にも同じ強制収容所が待っていた。とすれば、とくに「ユダヤ人の運命」を特別視する必要があるだろうか。ケルティースは、強制収容所での「ユダヤ人殺害」は「ユダヤの悲劇」とか「ユダヤの運命」ではなく、「キリスト教社会のモラルと文化 2000年の恥辱」の凝集点だという。恥辱という意味で「ホロコースト」を使うなら、それは今も続いており、現在形で書かれるべきだと言う。

小説の映画用脚本も出版されている（*Sorstanlanság filmforgatókönyv*, Magvető, 2001, Budapest）。三部構成の最後の場（第三部第6場）に、小説と同名の表題を付している。この場面は、主人公がブダペストの家に帰り、近所の叔父夫婦との会話から構成される。夫婦が少年に「これから人生をやり直さなくちゃね」と話しかけるのにたいし、少年は「それじゃ、これまでの僕の人生はどうなるの。何もやり直すことはない、ただ今までの人生を続けるだけだ」と答える。この場面は、北朝鮮に拉致され、戻って来た人々の感情とも通じ合う。

強制収容所から戻ってきた人々にたいし、強制収容所は憎むべき存在で、「ゼロの体験」だと断罪する。同じように、北朝鮮で過ごした24年間の生活は本当にゼロだったのだろうか。人が生きていく限り、時間が流れる限り、そこには生の営みがある。社会全体が洗脳されることはありえない。強制収容所が「囚人の自治組織」だったように、北朝鮮にも支配者の生活とは違う日常生活がある。誰がその24年間の生活を否定することができようか。

ケルティースであれ、北朝鮮に拉致された人々であれ、異国の生活は運命だったのだろうか。そこには自分の意志を働かせる自由はなかったのだろうか。逆に、

もし拉致されていなかったどうだったのだろうか。幸せだったと言えるだろうか。他人が判断できることではない。ケルティースは自らの体験を通して、それぞれの人生の意味や意義が他人によって簡単に断定されるようなものでないことを教えている。

「人類の恥辱」を忘れるな

スウェーデン政府は『運命の不在』をスウェーデンの高校生に無料配布することを決定した。同じ年頃の少女が自からの疑似体験として、ケルティースの小説の世界に入り込むことを推奨したのだ。ナチの蛮行を人類の恥辱として普遍化し、ヨーロッパ大陸の統合という新しい世紀に向かって進むためにも、これを新しい社会を担う世代に伝えたいということだ。

ナチが冒した犯罪をたんにドイツ民族の問題としてでなく、人類の問題として捉える視角には、やはりヨーロッパの文化と文明の深さが基礎になっている。そのような視角を日本社会は共有しているだろうか。恥辱を忘れる者は、再び恥辱にまみれるのではないだろうか。